

博物館と学校教育との連携の試み

——展示の説明演習を取り入れた教員研修——

大平高司

A Trial of Connecting the Museum and School Education —— a Teachers' Training Program Adopting Practice for Interpreting Exhibitions ——

Takashi OHIRA

1. はじめに

平成元年3月改正された小・中学校の「学習指導要領」では、小・中学校の社会科において、博物館などの活用をすすめる一文が新たに加えられた。岐阜県博物館は設立当初から、学校教育と密接な連携を図り、児童生徒の学習に役立つ機関となることを基本的性格の一つとしてきたが、これにより学校教育とのつながりを一層有機的なものとする必要が増してきた。

さて、博物館と学校教育とのつながりをより有機的なものにするためには、博物館の資料や教育普及体制を充実させるとともに、学校の博物館学習に対する理解を深めていかなくてはならない。それには、博物館利用に関する学校教員への啓蒙活動が必要だが、ここでは、当館が美濃地区（当館の所在する地区）の小・中学校教員初任者研修で行った啓蒙活動を、その事例の一つとして紹介したい。

2. 演習方式を取り入れるまでの経過

美濃地区の小・中学校を統括する美濃教育事務所は、初任者研修の一環として、長年当館での研修を行ってきた。対象は美濃地区の小・中学校のその年度の新採用教員である。内容は、当館員の専門分野に関する話を聞き、館内の展示を見学するというものであった。しかし、このやり方だと当博物館の全体像は理解できるが、どうしても研修を受ける側が受け身になりやすいという欠点があった。そこで平成元年度から、美濃教育事務所の提案により、もっと有意義な研修の方法がないか、検討を行った。ポイントは、研修者が自ら活動する演習方式を取り入れられないかということであった。当館としても、博物館を将来授業の一環として活用してもらうためには、そのような演習が大変有効であると考え、積極的に協力することになった。そして、平成元年度と2年度の2回、展示の説明演習を取り入れた教員研修を行った。以下に紹介するのは平成2年度の研修の内容である。

3. 研修内容

(1)参加者と班編成

平成2年度のこの研修に参加した初任教員は、小学校44名、中学校27名あわせて71名であった。この参加者を、あらかじめ美濃教育事務所の方で、小学校6班、中学校4班に分けてもらった。それぞれの班の構成は6～8名である。（各教員の専門分野・担任学年とは無関係に分けた）

(2)進行

ア. 岐阜県博物館の概要と利用についての講話（20分）

当博物館の概要と博物館学習の意義について、まず理解してもらう。当館学芸部長が担当した。

イ. 日程説明および指導に当たる館員の紹介（10分）

研修の趣旨・方法・日程の説明を行い、各班の指導に当たる館員を紹介する。

ウ. 常設展の見学 (30分)

研修者は、自分の班が後で説明演習を行う予定の展示室を除く常設展示室を見学する。時間が短いため、ざっと見学して岐阜県博物館の展示のあらましを知るのが目的である。

エ. 説明演習を担当する展示コーナーの決定 (20分)

説明演習のために各班に割り当てられた展示コーナーを見学し、自分の説明する展示コーナーを決める。その際、班の中で説明するコーナーが重ならないようにする。

なお、小学校教員は自然展示室に、中学校教員は人文展示室に割り当てた。これは、人文展示室は小学校低学年児童に説明するのは難しかろうという配慮からである。また、この段階からは班のリーダー(1名)を中心に活動を進めるようにした。

オ. 説明演習のための調査学習 (50分)

指導学年、児童生徒自身による自主的な学習への発展、他の参観者もいる所での説明のあり方などを考慮して、4分程度の展示コーナー説明案を考える。

当館発行の「総合案内」「展示案内ここをじっくり」などの冊子や、館内の図書資料室や郷土学習室の図書資料を利用できるようにした。

どの研修者も、この調査学習には熱心に取り組んでいた。当日は、この時間の次に昼食・休憩時間があったが、昼食もそこそこに調べ計画を練っている研修者が多かった。

カ. 説明演習および指導・講評 (70分)

各班に分かれて、自分の担当した展示コーナーを順番に一人ずつ説明する。1つの展示室を担当しているのは2班(自然展示室1は4班)あるが、それぞれの班で別々に活動した。そして、同じ展示室を担当している2班につき1人の指導者がつくようにした。この指導者には主にその展示室を担当している館員になった。研修者が全員説明を行った後、研修者同士で反省・批評を述べ合い、さらには指導者が講評を加えた。

研修者は、同じ初任教員数人を前にして説明するというで少し緊張しながらも、一生懸命説明を行っていた。小学校低学年を想定して説明を行っていた班では、説明を聞く側が児童のつもりになって聞き質問をするという光景も見られた。中には、館員が思いつかない観点からの説明・発問があって、参考になったようである。

館員の指導・講評は、多くは展示コーナーの説明のポイント、子供たちの興味を引く発問・説明の仕方などに関するものであった。

キ. 特別展見学および館員の専門分野についての話 (50分)

10分ほどの休憩の後、当日開催中の特別展を、展示を担当した館員の解説により見学するととも

展示コーナー	担当班
自然展示室1「郷土の自然とおいたち」	
I. 自然のおいたち(15コーナー) ……………	3・4班
II. 自然の姿(10コーナー) ……………	1・6班
III. 自然と人間(4コーナー) ……………	
自然展示室2	
「郷土のさまざまな自然」(13コーナー) ……………	2・5班
人文展示室1	
「郷土のあゆみ」(33コーナー) ……………	7・8班
人文展示室2	
「郷土の美術工芸」(9コーナー) ……………	9・10班

表1 展示コーナーと担当班



▲説明演習風景

に、演習で指導に当たった館員の専門分野の話聞く。人数が多いので、10班を半分に分け、前半と後半で入れ替わるようにした。(右表参照)なお、この時は特別展「白山の自然」を開催中であった。

館員は、スライドを使って専門分野に関する話をしたり、あるいは収蔵庫に案内し博物館を支える資料収集活動について話したり、またあるいは野外調査の経験を活かしたりと様々であった。聞く人数が少ないせいもあり、研修者はリラックスして新鮮な気持ちで聞いていたようである。

	1 班	2 班	3 班	4 班	5 班	6 班	7 班	8 班	9 班	10 班
前 半 (25分)	特別展見学					専門分野の話				
						館員 A	館員 B	館員 C		
後 半 (25分)	専門分野の話					特別展見学				
	館員 A	館員 D	館員 E	館員 D						

ク、校外学習のあり方についてのまとめ (20分)

表2 特別展見学と館員の専門分野の話

説明演習の体験や、館員の指導・講評をもとに、教師の事前の準備、学習中の説明、事後の指導のあり方などについて、班ごとに意見を交流し成果をまとめる。

4. 研修を受けての感想

この研修の後、全員にこの研修に関するアンケート(無記名)を取り、様々な感想・意見を知ることができたので、以下主なもの整理して記す。(○は良かった点、△は改善すべき点)

〈研修の方法について〉

- 事前の教材研究および発表という活動はとても実践的でよかった。(9人)
- 班で演習するという形式のため、皆が活動できてよかった。(他の人の説明が聞けてよかった。他の研修者と語り合う場があってよかった。など)(10人)
- 見学者としてではなく、引率者の立場で見学研修ができ、とても勉強になった。(4人)
- ただ見るだけだと展示の表面しか見ないが、説明するためにじっくり見られた。(2人)
- △他の展示室をもう少しゆっくり回る時間がほしかった。(8人)
- △博物館にある資料がどのように学校教育の中で生かされるか具体的な研修がほしかった。(3人)

〈指導内容について〉

- 講話の中の「よく調べ、多くを語らない」という話に、本当にそうあるべきだと感じた。(7人)
- 演習の後の学芸員の話により、展示物の見方、見せ方(注目のさせ方)、利用のし方、説明の方法の話が勉強になった。(6人)
- △40人ほどの児童に対する説明に関してのアドバイスがほしかった。(1人)

〈博物館学習について〉

- 実物を見て説明するということはすばらしいということを改めて感じた。(4人)
- 地球の誕生から古生代までという古い教材で、しかも対象が小学校2年生ということで、どうやって教えるのか最初は無理かなあとも思ったが、言葉の選び方や説明を工夫することによって、2年生の子供に対してでも興味深い話ができるということを改めて感じる事ができた。(1人)
- △何年生の子供の指導に使えるか教えてほしい。(1人)

〈利用のし方について〉

- ・学校が社会見学・遠足という形で良いからできるだけチャンスを与えるべきだと感じた。(3人)
- ・利用しようと思えば使いやすいと思うが、そこまでの行動がなかなかおこせない。(2人)
- ・関連した学習のあるごとに利用したいが、なかなか難しいので、授業の発展の段階として利用したい。(3人)
- ・学校という団体を単位とした利用は難しい。(1人)

5. まとめ

さて、この研修の成果については、どのように評価することができるであろうか。上記のアンケートを見る限り、研修のやり方について否定的な意見はほとんどなく、おおむね好評であった。展示の説明演習という形式は、展示を見学して解説を聞くという形式より、研修者が主体的に活動でき、実際の博物館学習に近い体験ができるという意味で、より実践的であると言えるだろう。研修の目的を、教員が見聞を広めることでなく、将来実際に児童生徒を引率して博物館学習を行うことに置かなければ、この説明演習というやり方は大変有効であると考えている。ただ、調査学習や説明演習に時間が取られるため、常設展示をゆっくり見る時間はなくなる。1日の研修ではその時間まで取るのが難しいので、別の日に個人でゆっくり見てもらうしかないだろう。

今後も、この研修をより実り多いものにするため、美濃教育事務所と共に検討を加えていきたい。

6. 今後の問題点

最後に、実際に当館を小・中学校が利用する場合の問題点について考えておきたい。アンケートの中でも「関連した学習のあるごとに利用したいが、なかなか難しい……」という意見があったが、博物館学習の意義は認めても、いざ授業の一環として利用するとなると、簡単にはいかない。よく聞くことは、交通の問題である。当館に歩いて来られるのは2校だけであり、当美濃地区内でもその他の学校が当館を利用するとなれば、バスや電車を使うことになる。その経費負担や授業時間のやりくりが問題となって、気軽に利用することが難しいのである。その問題を解決して博物館を利用した学習を行うとなれば、博物館学習にそれだけの価値を認めてバックアップする学校の態勢が必要になってくる。

もう一つの問題点は教師の負担であろう。博物館を学習のために有効に利用するためには、教師の下見調査、資料の準備、事後指導が必要となる。これは、なかなか手間のかかることであり、遠足などで当館を利用する場合でも、十分なされている所は少ない。

以上のような問題点を考えてくると、このような研修を行っても、来館する学校が増えたり、授業の一環として有意義な利用をする学校の割合が増えたりするというような、目に見える成果はなかなか出て来ないかもしれない。しかし、研修によって、博物館学習の意義を理解する教員は着実に増えていくだろうし、長い目で見ると、博物館と学校教育との連携を密にすることにつながっていくだろう。